

# 社会臨床の視界

(7)

## 男親と父親の「あいだ」にある父性の涵養

—虐待親たちに問うたことを今度は自分の問題として考えてみる—

中村 正 (立命館大学大学院応用人間科学研究科)

### 「男親塾」という名前の由来

大阪の児童相談所で家族再統合支援のグループワークと個人のカウンセリングを実施している。このグループワークの名前は「お父さん子育て塾」としていた。でも、なんとなくしっくりこないと思っていたので、どんな名前がいいと思うかと虐待する男性たちに聞いたことがある。その結果、「男親塾」におちついた。男性のあり方や悩みを重視してみてもどうかとみんなが指摘した。それまで子育てしてきたわけでもないのに、虐待した父親を対象にして「子育て塾」というのはハードルが高すぎるというのである。なるほどそれもそうだ。もちろん、親であるという点は無視できないが、その親はもっぱら稼ぐ役割の親であった。なかには共働きの夫婦もあるが、子育ては妻の役割だと思っており、子育て能力を問題にされると困惑してしまうという。

それでも何か釈然としない点もある。暴力を用いたことで家族関係にひびを入れ、傷を負わせ、子どもを保護せざるを得ない事態を招いたことへの責任は問いたい。せめて、「子育てなんて知ったことではない。それは妻の仕事で、俺は稼いでいる。」と思う意識それ自体が虐待するリスクとなる認知であることには気づいて欲しい。とはいえ、

そうした男性たちにとって腑に落ちる言い方でアプローチしなければならない。より適格的で受け入れられるやり方が欲しい。こうしてグループワークに参加してくれる程度に意識のある男性たちに相応しいアプローチとしたい。これを加害者臨床論では「応答可能性・反応性」という。したがって、男でありつつも親であることの面も考えてみたいという曖昧な当事者意識ではあるが、彼らの自己認識を尊重することとした。名付けをめぐる意見の交換をとおして、男親と父親という言葉やそのあいだにはいろいろ考えなければならない何かがありそうだと思った。

今回は、私の子育て体験も交えてこうした事柄を考えてみようと思う。男親なのか、父親なのか、換言すると、稼ぎ手役割とケア役割の両立やバランスをどう考えることができるのか、男親・父親・夫としての立ち位置を確認したいと願い、虐待親たちに発した問いを自らの来し方と重ねて記しておくことにしたい。

さらに、父親という家族制度や社会制度にも関連する面がある。嫡出推定の原則がある。民法 772 条は妻が婚姻中に懐胎した子は夫の子と推定するという規定である。この規定は嫡出推定制度の一環であり、子の福祉のため父子関係を早期に確定し、子の身分関係を安定させることが目的である。

婚姻中に懐胎したこともって父親は制度によって推定されるということだ。また、一夫多妻制の国であれば父親のあり方は異なる。こうして、男性や父性・父親が制度的、歴史的、社会的存在であるとすれば、男性性（男らしさ）、父親・父性は構築物、フィクション、虚構としての面があることになる。同じように母性もまた育児へと女性を駆りたてるように構築されてきたといえる。親のあり方は創られたものであるとすると、男性にケアの能力が本来的に欠如しているのではなく、社会的に疎外され、剥奪されてきたことの結果であるともいえるので、男性たちだけを責めることにはならないし、努力の結果、これからでも構築できると考えることができる。

別の言い方もある。家族のなかでの親の役割としては「ケアかキャッシュか」という面があり、それは養育力の2面性（経済的とケア的）を意味し、さらにそれらがジェンダー分割され、男性と女性に割り振られていき、それを家族という制度が表現している。だから男性のケア的な側面である父性を涵養していくためには、こうした社会のあり方も問うことになる。ケアから男性たちを疎外した社会を「直し」つつ、虐待するその行動的心理的な面は「治す」というスタンスである。これは社会臨床としての重要なテーマとなる。

私の子どもが就学する前後、NHKの『すくすくネットワーク』誌（NHK出版局）に連載していた体験的父親論がある。1998年頃のことである。私自身の子育て日記でもある文章をひっぱりだし少々のアレンジを加えた。一般的に男性とケアすることに関する主題が数多く生成している社会となっており、そうした意味でも私のなかでは持続しているテーマである。現在放映され

ている放送大学の「世界の結婚と家族」という教養科目（2012年度まで）で同じような話をしているので視聴可能な方はご覧いただければと思う（テキストは、宮本みち子他編『現代世界の結婚と家族』、放送大学教育振興会、2008年。そこで「男性と父親－父親政策の視点から－」、「家庭内暴力と家族関係－男性・父親の視点から－」と題した章を書いている）。

### 初めての父親たちとのつながり

#### －「子育てすべきだ！」とはいわない

立命館大学大学院応用人間科学研究科の東日本大震災への支援活動の一環として青森県むつ市立図書館で「父と子の絵本の読み聞かせワークショップ」を実施した。同僚の村本邦子さんが企画した家族支援のプログラムの一コマである。本マガジン編集長の団さんの漫画展と講演会もあった。関西はまだ暑かったが、東北の秋の気配を感じた9月24日の土曜の朝のひとつときであった。

「父親も子育てすべきだ」という無粋なことを訴えたのではない。楽しい子育てをする小さなアイデアを伝え、一緒に楽しみたいと願って企画した。これを考えるための言葉も紹介した。たとえばIQとEQ（intelligence quotient / emotional quotient）のこと、つまり、感情や情操に関わる知的な働きのことである。こうした立場から男性問題に関わるいろんな取り組みをしていることも紹介した。

まずは気分ほぐしを行った。「ことば、からだ、かかわり」の関係を深めるためのゲーム風のワークである。父親たちが出会いをうまくすすめるためのウォーミングアップだ。

はじめは「からだほぐし」と気持ちトーク。二人一組になり肩もみをした。一分間、黙ってもむ、次にはおしゃべりしながらもむというワークをおこなった。おしゃべりしながらだと気持ちがよいということを感じ取る。時間もあっという間に過ぎていく。「あ、そこそこ、ここは痛い！どんなお仕事しているのですか。何か運動していますか。いい身体していますね。」などと雑談が交わされる。気持ちトークである。

次に、「あとだし負けジャンケン」の練習をした。文字通り、後に出して負けるというゲームである。でも後に出しても勝ってしまう。最後に、「あいこ」になった時に握手をして和解する。勝ち負けのない平和な握手になり、ホッとする。家族同士でやると面白いともアドバイス。じゃんけんは勝つものと思っている。後にだしても勝ってしまう。身体はずるい。習慣の力は恐ろしい。男性性も同じように習慣になっている、としめくくる。

最後に、言葉イメージ練習、一種の群読である。一つ目のお題は「雨が降る」だ。私が「雨が降る」という。次々と父親にまわしていく。「しとしと」、「ジャージャー」、「ごうごう」、「ぼとぼと」と。「わんさわんさ」と続く。「ばしゃー」、「さらさら」、「びちびち」、「どんどん」、「ごーごー」と。たんなるイメージだが、体験と重ねて気持ちがこもる。

二つ目のお題は「ひとが歩く」。同じように続ける。「てくてく」、「ぶらぶら」、「さくさく」、「ぼとぼと」、「のしのし」と歩く様子を音でつなぐ。「ああいそがしいそがし」、「おそるおそる」、「どんどん」とやや転調する。もっと情景を含めて、「てをつなぎ」、「足をとられ」、「柵を越え」、「海をこえ」とも広がる。

これらの練習は絵本の世界に入るためのウォーミングアップ。楽しく子どもとシンクロするための「のり」が大切となるからだ。自分の体験と重ねてのイメージ練習ともいえる。気持ちを込めてという意味はこういうことだとも話す。そうこうするうちに滑舌もよくなっていく。その時は時間がなくてできなかったのだが、「かっぱ」という谷川俊太郎さんの詩をつかったメニューもある。

かっぱかっぱらったかっぱらっぱかっぱ  
らった とってちってたかっぱなっぱか  
った かっぱなっぱいっぱかったかっ  
てきってくった

これはどう読んだらいいのかな？という言葉遊びだ。いちおう正しい読み方は次のよう。でも楽しめればいいので正解を探すことが目的ではない。念のため。

かっぱ／かっぱらった／かっぱ／らっぱ  
／かっぱらった／とって／ちってた／かっ  
ぱ／  
なっぱかった／かっぱ／なっぱ／いっぱ  
かった／かっ／て／きってくった

これらは以前にも紹介した「レポートトークとラポートトーク」の練習である。感情とコミュニケーションと関わる男性の表現力の弱さが気になっているのでいつもこの話をしている。とにかく初めて出会う父親たちだ。難しい意味づけはせずに、ワークをしながらうちとけあうことがねらいである。やればのりのいい男性たちだ。

5組の幼児と父親が参加した。父親が読みきかせた方がいいとセレクトした絵本の紹介をした。まず、エリック・カールの仕掛

け絵本、『パパ、お月様とって』（偕成社）だ。父親の気持ちが雄大になる。そう子どもに言われたら、「よっしゃ！」となるはずだ。他には、佐野洋子さんの『100万回生きたねこ』（講談社）、田島征彦さんの『じごくのそうべい』（童心社）もおすすめした。そして今回、一押しとしてとりあげたのは宮西達也さんの「ティラノサウルス」シリーズである（ポプラ社）。『おまえうまそうだな』、『おれはティラノサウルスだ』、『きみはほんとうにステキだね』、『あなたをずっとあいしてる』など多数でている人気絵本となっている。『おまえうまそうだな』という絵本のタイトルを大きな声で読むだけでも子どもたちは大騒ぎ。

はじめは練習。私が『パパ、お月様とって』と『100万回生きたねこ』を、ゆっくりと、感情を込めて読んだ。ここまでは父親だけの会である。次に、子どもたちを招いて今度は父親たちの番だ。すきなところに陣取って父親と子どもたちの絵本タイムが始まる。おとなしく父親にだかされている子ども、絵本を指さししながら別の話へとひろがっていく子ども、神妙な顔つきで話に食い入る子ども、いろんな輝きがある。日頃の姿が目に見えかぶ。

### 絵本の力-父親の情操教育

こうした経験からすると、男性が親になるには特別な努力や意識づけが要るのだと思う。私自身も自分の子どもと遊びながらたくさんの発見をした。なかでもこうした絵本や物語の読み聞かせは面白かった。こんな絵本も印象深く残っている。「ぼくの父親？ふつうのおとなだよ。やさしいけど。でもたいていは、なんかちがうことを考えてる。遊ぶことができないし。」という少年

のつぶやきをもとにした『小さくなったパパ』（ウルフ・スタルク、小峰書店）という絵本だ。これはてっきり私のことかと思った。私も娘と遊びながら別のことを考えていることが多い。たとえば研究や原稿のこと。なにかネタはないかといつも考えてしまう。純粋に遊べないとはこうしたことをいうのだろう。思えば幼い頃のように遊べなくなっている自分にも気づく。いつのまにか鎧を着て、世間にあわせ、日々のことに精一杯で、何かしら流されていくようになってから、ずいぶんと時間が経ったように思えてくる。育児をしながら感じる時間と空間は、30代半ばの父親に微妙な変化を与えてくれていた、と50歳をこえて多忙を極める折り返しの齢になってそう思う。

絵本の読み聞かせは、新しい時空間にかのま誘ってくれるいいチャンネルだった。とくに父親の「男らしい」人生からすると、一種の「癒し」のような作用を果たしてくれた。絵本は棒読みでは味気ない。感情や気持ちを込めて読むのが楽しい。ゆっくりと語りかけるようにして読むと子どもの目が輝くのがわかる。そして話があちこち飛ぶのも楽しみだ。子どもは絵本に反応して一緒に物語を楽しむことができる。むしろ子どもの空想力に感心し、教えられることが多い。時間の流れをゆっくりめにきりかえ、空想の世界に身を漂わせ、共にたゆたうことができるいい時間だ。こうした感覚は、男性の日常生活にはないことだと思う。だから面白い。父親の情操教育にとって絵本や物語はとても大切なように思えた。いつでもできる父親の育児だという点も大事だ。

他にも『うちに帰れなくなったパパ』（徳間書店）も印象深く残っている。書いた人はラグンヒルド・ニルスツンというノルウ

エーの作家。舞台は夫婦と子ども2人で暮らす家族。新しい家に引っ越したその翌日、父親は今日も元気に「いってきます」と仕事に出かける。ところが、ひょんなことに家への帰り方がわからなくなってしまった。バスに乗るがどこで下車していいのかわからない。見覚えのある街を歩き回るがたどり着けない。途中、探検家、ハングラライダー乗り、カウボーイなどいろんな人に出会いながら家を探す。探検家は野心丸出しで有名になることを夢みている。ハングラライダー乗りは「みんな飛んで俺をみあげているのさ」と優越感まるだし。レーサーの彼は「ひとりぼっちだけど、砂漠まで走る」と無理しながらも意気軒昂。野に暮らすカウボーイは「まだまだ旅の途中ってとこさ」と雄々しい。「へー、みんな男らしく生きてんだ」と父親は感心するけど、「早く家に帰りたい。しなきゃならない仕事がある」とつぶやく。世間の男って、見栄と打算と野望と孤独に生きているんだなと感じながら、歩き疲れて戻ったところは生まれ育った母の家だった。

家を探しながら出会ったこの男たちはこの父親の分身たちだったのかもしれないと思う。でも、寝ようとしたベッドはすでに小さく、寝心地はよくない。「ここじゃもう眠れない」とつぶやく父親。この一言でこの父親は家に帰ることができるだろうと私は感じた。ママからの自立を自覚する思いとあきらめが、このつぶやきに込められているように思えた。この男性のように帰る場所には「ママ」がいる。日本の父親はたくさんの「ママ」に囲まれて生きている。産みの親はもちろん、妻にも母役割を求め。もしかしたら娘にも母役割を押しつけるかもしれない。息子がいればその妻にも舅として母役割を求め。母役割とは、食

事をつくらせ、他人の世話をし、掃除をし、育児や介護を担当するということだ。こうして見ると、家のなかで何もしないという男性役割、父親役割はずいぶんと楽だ。それを支えるのがたくさんの「ママ」だ。もちろん仕事帰りに立ち寄るスナックにも「ママ」はいる。うーん、やはり「ママづくし」の男の生活。

依存してばかりの生活では自立心が萎えていくとこの絵本は語っているようだ。これからの社会に必要な身の周りの生活的自立能力は身につかない。仕事ばかりの一本調子な人間は折れるとこわい。やはりマルチな人間はしなやかに、変化に対応できると体験的に思う。この社会、先行きがなかなか見通しにくい。私が家事や育児など、家のなかのことに関心をもった方がいいのではないかと薦める理由は、男女共同参画社会づくりのためだけではない。ようするにいろんな発見があつて自分のためになることが多いからだ。将来何が役立つかわからない。男子厨房に入り、子どもの世界を探りながら知恵と技を磨いてはどうかと思う。体験上、仕事にプラスになることが多かった。家のなかでは使う脳の部位が異なり、言葉や感情もちがうような気がする。

そしてなんといってもおそろべきママの独占状態にある家庭という領域に父親を解放することの大切さである。そうしないと子どもたち、とくに男の子は同じようにまた帰るべき家を見失うことになるのだろう。息子の自立にとっても父親の自立は欠かせないと思う。生活のなかでみせる実の姿の父親がみえないので、このままだと父親受難となる。「父親って、何の役に立つの」と子どもがたずねる。「うーん、なんだろう。わかんないな。でも給料をもって来るからね」と語る母親。こうした会話がどこの家

からでも聞こえてきそう。父親は家のなかで居場所をなくしていく。「うちのパパ、今日はきちんと帰ってくるかしら。もしかしたら……」と思う妻、そして「俺も大丈夫かな」と思う父親は意外に多いのかも知れない。

では、家に帰れなくなったこの父親が探していたのはいったい何だったのか。少子高齢社会、男女平等という大きな変化のなかで迷う父親の姿のようでもある。稼ぐ役割の男親役割に徹していればいいというわけにはいかない。長く母性（ママ）に依存してきた息子の哀れ（自律的できないこと）も斟酌すべきだろう。依存から脱出するためにも家のなかでケアの役割を磨き、それを親性の一環としての父性として育んでいきたいものだ。この隘路に男親から父親への変化が位置づく。

### 親性を育むー 鍵となる父性の涵養ー

でも父親は憂鬱である。突然に子育てと介護を託され、期待される世の中となった。というのも、父親は知らないのだ。どんな具合にして親になればいいのかを。誰も教えてくれなかった。父親の父親は何もしてくれなかった。「生きてきたように老いていく」ということと同じで、「人は育てられたように子どもを育てる」しかない。そんな父親に、「子育てしなさい！」だけでは義務としての育児となるだけだ。

1970年代かけて専業主婦の比率が高まり続けた。その頃生まれたのが、今現在30から40代の現役子育て世代である。そして介護もこれからは期待されている。稼ぎ手である大黒柱役割を担う夫と内助の功で支える妻が一姫二太郎を育てるといった典型的な「幸せ家族」に育った父親と母親は、それ

が普通だと思っている。父親は何も知らない。

だから父親は少々あわてている。父親の「家族的責任」という言葉が登場したからだ。子どもの問題行動が世間を騒がせるたびに、父親の責任はどこへいったと問われる。もちろん、そんなことはわかっているが仕事が忙しくてという事情も分かる。でも、こうした「幸せ家族」には母性過剰と父性不在がつきものだということも考えておくべきだろう。もちろん父性でも母性でも親は親だから、自立した人として子どもを育てていく責任は両方の親にある。とはいえ、さしあたり「男は外のことを、女は内のことを」という具合に、性別役割を担って生きざるを得ないジェンダーの現実が強く作用してきた。現代は、その両者のバランスが求められ出したといえる。男性は父親として家族の方に関心をもっていくことが期待されている。いってみれば「父親の家族復帰支援」である。「女性の社会進出」という言葉はあるが、「男性の家庭進出」とはいわない。ジェンダーにおいて非対称である。バランスを回復させるために広めたい言葉である。

したがって社会的に創られたこうした関係性を変え、「男性の家庭進出」めざす父親にはヒントが必要だし、スキル伝授も導入部分としては有益だと思う。家族への帰り方、つまり子どもとの遊び方や勉強のさせ方のヒントである。各地で頼まれて父親教室を行うことがある。冒頭のむつ市の企画はその典型である。絵本の読み方教室、料理教室、妊婦教室、介護体験講座、遊びかた講座、悩み相談、脱暴力の支援など多彩な活動を仲間たちと行い、ヒントをともに考えてきた。父親の父親が何もしれくれなかったので、新しい男性たちが相互に学び

はじめたのだ。最初のうちは照れくさいけれども、慣れてしまうと男たちも捨てたものではない。義務としての子育てではなく、子どもとの関わりあいを楽しむようになるともう大丈夫。

こうした活動をしながら思うことは、育児にかかわる能力は本能でもなんでもなくて、身につけるものだということ。それは母親だってそうだ。「母性本能」なんていう言葉はそろそろ死語にした方がいい。女性たちには育児の押しつけになるし、なによりも男性が無視されている。男性がケア領域から疎外されていく。そして、女性にとっても親になることは課題をもった時代なのだから、男も女も新しい育児のあり方を模索しなくてはと思う。親性の形成という課題である。

しかし、親性のジェンダー分割があるので、保育園でも、幼稚園でも、どこにいても母性過剰だ。育児は女性の仕事となってしまっている。「ねえお父ちゃん、どうしてそんなに保育園の送り迎えや会長（保護者会の仕事をしていたことがある）なんてしているの。別に暇じゃないのに。よその家はお母ちゃんが多いよ。」と保育園時代に娘が話してくれたことがある。「お父さんはなんのためにいるの」とは言わない娘けれども、やはり父親と母親は違うと思いついてしまっていた。「子どものことも仕事のこととも両方ともできるといいの。」と答えた。

先に紹介してきた絵本でも同じだ。父親が知らない間に母親が読み聞かせする世の中の大半の絵本は、父親を必ずしも良いようには描いていない。ずっとけた父親、何もできない父親、死んでお星様になってしまった父親、ヒーローのような偉大な父親という具合だ。どれも実感にそぐわない。それに比べると、母親はよく登場するし、

描かれ方もとくに違和感はない。くる日もくる日もこうしたバイアスのかかったストーリーのお話に浸っていることを父親は知ったほうがいいだろう。もちろんそれほどまでに男性たちが子育てをさぼっていたということに他ならないのだが。

## 二人だけで育児をするのではなく

### —家族を開くほうへ

もちろん男性も育児に関わる努力はしているし、イクメンという言葉も定着し、各地ではおやじの会が活動している。しかし、男親としての育児は非日常的なようである。まるでお祭りのように。普段は何もしない男親だから「こころ」とばかりに張り切る。土日ともなれば出番で、遊園地に行ったり、公園でスポーツしたりと頑張る。男の料理というのも曲者でやたらと豪華に金ばかりかけるし、「どうだ、うまいだろう。俺もやればできる。」といわんばかり。たとえまづくても、「そうね。おいしいね。」と言わなければ後が怖い。

育児や家事はきれいなことばかりではない。感情のかたまりのような子どもを相手に「なにこのガキめ！」と思うことも多い。子どもはとにかくよく泣くし、言うことを聞かない。食べ物は散らかすし、ミルクはこぼすし、なんでも口に入れようとするし、それはもうてんやわんやの大騒ぎである。夜泣きでもされた日にはもう大変だ。翌日の仕事を心配しながら、寝かしつけようとドライブしたり、夜中の散歩に出かけたり、ガレージで遊んだりと休む暇もない。どちらが面倒見るかで夫婦仲が悪くなりかけることもしばしばであった。「もういや！」という場面が子育てにはつきものだった。でも子どもの寝顔をみて癒される。辛いこと

はすべて忘れてしまう。そうした日常の繰り返しこそが育児だ。

こうしたことからすると、非日常型の男親の育児は「いいとこ取り」になってしまう。母親にとってはそれ自体がストレスとなる。なぜなら、非日常の育児しかしない男親は子どもからはやさしく見えるからだ。力任せに一生懸命に遊んでくれるし、おやつも買ってしてくれるかもしれない。母親のようにあれこれ厳しく怒らず、小言も言わない。だからうまくできれば父親は好かれる。でも母親はそうはいかない。24時間子どもとつきあえば「うるさい母親」となるのは当然だ。

とはいえ、こういう男親でも貴重である。最初は非日常的でもかまわないのかもしれない。そしてゆっくりと日常化していけばいいと思う。

そしてもう一つ。しかし、「そうはいってもなかなか普通の育児なんてやってくれない」という前に、思考の枠をずらしてみるといいと思う。ストレスをためて「あなたももう少し面倒みてよ！」というのでもいいが、少し異なる角度から家族を眺めてみたい。そこで提案。「半分こイズムはもうやめよう」というのが私の考えだ。男女協働参画社会づくりという際に問われているのは、私たちの男女平等への想像力と構想力だ。男も家事と育児と介護に参加しなさいというのは、正しいメッセージだ。間違っていない。けれども、妻と夫、女と男が向き合いながら、家族のなかだけですべてを平等に分担することでしか男女平等ということイメージできないとすると、それは貧しい。どうして家事や育児や看護や介護をすべて家族だけで完結させないといけないのだろうか。

「半分こイズム」がこの点を見失うと、

閉じた家族となってしまう。どうして他人が必要なのか。それは家族の人数が少なくなっているからだ。兄弟姉妹や親戚が多ければ、それだけ人間関係にもまれて学ぶことが多くなる。でも今はそうではない。人間関係が希薄になり、地域のなかに家族は開かれていない。家々は鍵をかけ、変なおじさんには要注意という看板もあるぐらいだ。ほうっておくと家族関係が閉じていく。だから、保育園や幼稚園の保護者同士、ベビーシッター、育児仲間、友だちとつながり、誰でもいいので風通しをよくして家族を開くことが面白いと思う。他人からはよく学ぶのが常である。

## ななめの関係

過去はそうだったといえるが家族は単独で子育てをしてきたのではない。地域や親族も含めて子育てはいろんな人を巻き込んでいた。核家族の親にのみ子育てを託すと、家族は閉塞していくばかりだ。ましてやさらに進む少子社会である。個々の家族の母親にのみ子育てが任せられ、周囲の社会から孤立することもある。そうすると関係が閉じていき、逆に家族関係は密になっていく。そうした密度のなかでは子どもと親が「あわせ鏡」のようになる。それは互いに互いを写しあう無限連鎖となる。「鏡のなかの鏡」が果てしなく続き、最期は何が何だかわからなくなり、見えなくなる。親子という二者関係はこうした状況に陥りやすい。

やはりいいのは三面鏡のような関係、つまり第三者を入れた関係だ。身近には、母と父と子の三者関係がある。単親の場合は二役をこなしてもいいし、他人でもいい。血縁関係でなくてもいい。要するに第三項があればいいのだ。つまり三面鏡だ。親子

という二者関係は閉塞しがちだし、脱出口がない。互いに互いを写しあい距離が取れなくなる。息苦しい。二人関係というのはその絆が強い分だけ他者を寄せつけない。二人関係は互いに他を独占したいという欲望を表わす。恋人関係がその典型だ。こうなると「ラブ・イズ・ブラインド」の世界だ。

子どもが小さい頃、保育園の保護者同士がつながりいろんな人が出入りし、よその家によく遊びに行っていたし、なんとか父親も子育てにかかわってきた。多様に第三者が存在していた。かつて、こうした関係はずいぶんとあった。地域のなかのおっちゃんやおばちゃんたち、そして親戚も多かった。叔父や叔母たちは親代わりで、厳しくもあり、やさしくもあった。友だちの親に真剣に叱られたこともある。子育ては地域や関係のなかで行われており、親より効き目があった。

社会のはじまりは三人関係にある。家族のなかにこうした三人目はどれだけ存在しているだろうか。家族を開く課題であり、たてとよこの関係だけになりがちな核家族に「ななめ」の関係を入れるということでもある。

### おもちゃに学んだこと

絵本にも学んだが、おもちゃも面白いと思った。おもちゃは女の子用、男の子用というのがはっきりしている。テレビやマンガもそうだし、日常使う子どもの身の回りの品々も同じようだ。女の子はピンク、男の子はブルーと色使いまで明確に分かれている。

男の子らしいおもちゃは、ロボット、戦争もの、お城や要塞、自動車、銃や刀など

だ。テレビゲームもよく似たもので、戦争、暴力、攻撃などが物語として背景にある。他方、女の子らしいおもちゃは、お人形、お家セット、ままごと、ぬいぐるみ、お化粧ごっこなどだ。実に整然と男の子用、女の子用と分かれているおもちゃは、やはり問題だし、なんとかならないものかとかねがね思っていた。

しかし、子どもはそんな親の思いを無視してよく遊ぶ。お人形をつかった遊びやままごと遊びも好きだ。もちろん男の子が好きなおもちゃもたくさんもっている。合体型ロボットや要塞のまわりで戦う兵隊のおもちゃもつかう。家に遊びにくる女の子同士で戦いごっこが繰り広げられることもあった。

ところが、同じおもちゃを使っても、私が体験してきた男の子同士の遊び方とは異なるのだ。娘たちのごっこ遊びは面白かった。兵隊たちが戦うまねをする。「エイ、ヤッ」「ブーン、ダダダッ」という具合だ。でも最後には、双方が戦いなんかやめて仲直りするのだ。「戦争してごめんね、これからは仲良くやろうね」と。そして、傷ついた兵士たちを動物のぬいぐるみが癒してあげる。「痛くないよ」と慰めてあげるのだ。大げさにいえば、平和が訪れて遊びは終わる。

こうした娘たちの遊び方をみていると、男の子用、女の子用という具合に分かたれているおもちゃの性差を乗り越えて、子どもたちがそれらを使いこなせばいいのだと思うようになった。目くじらを立てない。おもちゃだけではなくて、よく似たことは他にもいろいろある。テレビ、マンガ、ゲームだ。テレビを見るなどといっても無理だ。マンガに熱中するなどといっても反発されるだけだ。ゲームをするなどといっても無視される。だから、こうしたものとうまくつき

あうことが肝心なのだろう。

私の幼い頃とは全く異なり、現代の子どもたちはテレビ、マンガ、ゲームやおもちゃに囲まれて生きている。以前は遊ぶものが豊富でなかったから、自分たちで工夫し、時には作った経験もある。野に遊ぶこともたっぷりできた。逆に豊富にありすぎると創意工夫をしながら遊ぶ能力は衰退する。とはいえ、臭いものにフタをするように、こうしたものから遠ざけておけばいいというわけにはいかない。戦車から人形までいろんなおもちゃがあってもいいと思う。これらを使いこなす自主的な力が大切なのだろう。

## 男の子問題

米国コロラド州のコロンバイン高校銃乱射事件は 1999 年 4 月 20 日に発生した。その時にカリフォルニア州のバークレイに住んでいた連れ合いと娘に電話をかけたが、学校関係者はずいぶん深刻な様子だった。娘の通う学校では校長自ら親宛の手紙を書いたという。「週に何回かは子どもと何かを一緒に行く体験を」という内容だったらしい。食事を一緒につくる、スポーツをする、ピクニックにでかけるなど、とにかくなんでもいいからテレビやゲームに埋没しないようにさせましょうという内容だったという。

銃をもつことを個人の権利として認めた国ならではの激しさをみせるスクールバイオレンスである。そして多文化社会や競争社会であることの課題も垣間見える。もちろんこうした形態での暴力ではないが、学校をめぐる事件は日本のなかでも散見される。加害が男性であることが多く、そこに関心がむかう。男性問題に取り組む心理学

者ブラノン教授が男の子に期待する四つのメッセージを整理した。「勇猛心を持って、地獄を体験させろ、大物になれ、女々しくするな」というもので、男の子にたいして周囲の環境はこうしたメッセージを送るといこう。ジョン・ウエイン、ブルース・リー、クリント・イーストウッドがヒーローだった頃、つまり社会全体がこうした物語で大きく発展していた頃につくられたという。このような男の子像が一人ひとりの成長の物語として社会の発展の物語と重なり合っていた時代はまだよかった。「大きいことはいいこと」だった。だから男親が家になくてもよかった。男の子の成長と大黒柱として頑張る男親の姿と社会の進歩・成長は同心円を描くようにして調和がとれていた。重厚で長大な産業が男らしいイメージをつくってきた。喧嘩やいじめもあったけど、すべて大目に見られていた。

しかしそれはもう今は昔の話となった。成熟した社会ではこうした荒野を拓くようなパイオニア的な男の子らしさ像は邪魔でさえある。米国でも男の子問題は真剣に議論されている。たとえば、学習障害児として認められている男の子は女の子の二倍もある。注意欠陥多動障害は同じように十倍程度の差。躰についても男の子が困難だと感じる母親が多いと報告されている。学習についても安定した成績を示す女の子が多く、読み書きという分野だけではなくて、科学や算数という分野でも成績がよくなってきた。暴力の被害にあうのは男の子（性的な被害を除くと女の子よりも三倍近い）、自殺も四倍から十倍の格差で男の子は死に急ぐ。もちろん加害者となるのも男の子に多い（臨床心理学者、William Pollack, *Real Boys: Rescuing Our Sons from the Myths of Boyhood*、『本当の男の子—男の子らしさ

の神話から私たちの息子を救うー』という書物より)。まとめて言えば「男の子の困難」である。これらに対応すべくいくつかの取り組みがはじまっている。男の子の暴力や攻撃性をなくす予防教育であり、感情をきちんと言葉にできる怒りコントロールのトレーニングである。家族はもとより、学校も地域もこうしたことに敏感になりはじめている。

## 父性を育むケアの力

### -ワーキング・ファーザー

父親不在で、父性の欠如した家庭には母親しかいない。母親はもちろんがんばっているが、父親の出番は男の子問題をとおして考えるとよく見えてくる。日本の父親たちの子育て時間が一日平均 17 分だというのは国際社会においてはひんしゆくものだ。ケアとキャッシュの両方の役割をバランスよく保つためにも、男性のケア能力の開発がまずは大切だ。男の子の困難は自らをケアする能力の開発とも関わっている。ケアとは自己への配慮のことであり、それをもとにして他者への配慮が可能となる。

娘との二人暮らし体験が何度かある。その時は妻と娘がカリフォルニアにいた。子どもだけが学校の関係で先に帰国し、6 月に京都の地元の小学校一年生となった。二ヶ月遅れの新生だ。あわせて学童保育にも通うこととなった。大学の仕事と市民活動とに忙殺されながらも、子どものための時間を確保しなければならない。学生や地域の人々に保育サポーターを依頼して仕事との両立が可能な日程を調整する。幸いにして、職場である大学と小学校や学童保育所が徒歩数分以内のところなので、時間のロスが少ない。夕食の用意を中心にしてな

んとかやりくりすることとした。掃除、洗濯、炊事、あとかたづけはとくに苦になるわけでもない。本読みにも根気よく付き合う。二人で遊んで、入浴して、お話しながら寝てしまうという一日のリズムができてきた。

しかし困ったことがいくつかある。一つは髪の毛。当時の娘はロングヘアだった。暑いとき、髪を束ねたいという。「三つ編み」にして欲しいというのだ。これは困った。

「知らない世界」に出会い、呆然自失状態。教えている女子学生に聞くのも妙だし、あなたの髪で練習させて欲しいというわけにはいかない。そこで知り合いの美容師に相談した。三色の太めの紐を束ね、それをピンで壁に留め、指を交互にして編み物をするようにして練習すればいいと教えてくれた。子どもの髪はつややかですべりやすいので、霧ふきで濡らしながらやるといいよともアドバイスしてくれた。

毎夜、娘の髪を使って練習することになった。とはいえ、なかなかうまくいかない。「痛い!、へたくそ!、もういや!」の連発。特に毎朝となると時間がない。そこで、ヘアバンドを使ったり、左右に二つに分ける簡単なやり方でなんとかしのいでいたことを憶えている。それさえも時間がないときは、カチューシャでごまかした。

もうひとつの困りごとは裁縫だった。体操服に名前を書いたゼッケンを縫い付けなければならない。針と糸でできることはボタンつけぐらいだ。私にとってこんな作業は未知なる世界。どうすればいいのかわからず途方に暮れた。二着の体操服にゼッケンを縫い付けるのになんと三時間もかかった。おまけに苦勞のわりには仕上がりがよくない。我流だから仕方ない。暗澹たる気持ちだ。不揃いの縫い跡。しわになる体操

服。洗濯のたびにほつれていく感じがする。ぶつぶついいながらひたすら針を動かし続けた。

世のお母さんたちは本当に何の苦労もなくこうしたことができるのかと不思議に思い、周りの女性たちに聞いてみた。髪を編むことは別にして、裁縫に関しては、嫌だという意見の持ち主も少なくないことがわかった。自分の母にやってもらったという人が結構いた。そうかと納得し、私も母にお願いすることにした。

そういえば、日本の保育園、幼稚園、小学校はなんと手作りを重宝することか。とくに働いている母親はこうした手作り品に愛情を込めてやり、日ごろ、子どもとふれあう時間がない分をカバーしてくださいといわんばかりだ。弁当におやつ、裁縫、バザーの手作り品と次々にいわれる。働く母親にはけっこうきついだらうと、ささやかな経験から想像する。かくして、愛情の証はカタチに表わされなければならないとなる。

でも、手作り主義より手抜き主義の方が子育ては楽だと私は思う。少子社会なので、子ども一人あたりに注がれる愛情の量は多くなる。子どもからすれば息苦しいこともある。ほうっておいても子どもに関心が向かうので、カタチばかりの手作り主義は適当にやり過ぎして、もっと子どもと遊ぶ時間を確保したいなと思いつつ、難題に挑戦する日々が続く。三つ編みと裁縫に精出す「ワーキング・ファーザー」である。

### 男親と父親の「あいだ」－父性を育み、ケアの力をつけることの社会的意味

『XY－男とは何か』(筑摩書房)という書物がある。書いたのはフランスのバダン

テール。彼女の提案は「ママパパ」のすすめである。その本のなかでこんなことを言っている。男性はわが子の誕生を機に父親業を始める。生後数ヶ月の乳飲み子の間、赤ん坊のめんどうをみるために父親は、ママのような父親になる。父親というよりは、男の母親になると言ったほうがいいのかもわからない。もちろん、父親業といってもそれは「母親業」のようなものだけでも。

しかし、男が子育てする時にはある格闘をしているという。それは女らしさとの闘いだ。もっと一般化すると、受胎した瞬間から、男の胎児は女性的にならないように闘いをはじめるといってもいい。男の子は女性のお腹のなかで育ち、女性から生まれる。男の子は、母親が放つ女らしさ、自分の中の女らしさ、まったくの受け身という赤ん坊の地位が示す女らしさ、という三つの女らしさに逆らうことでしか生きる道がないという。ようするに、男の道とは女らしさと格闘するいばらの道なのだ。

だから、男性が家事や育児に関わるためには、みずからの内なる女性イメージや女性性あるいは伝統的な男性性とは異なる力能を開発し、総動員しなければならないこととなる。かくして、男性が行う家事と育児の家庭内役割は、男らしさイメージに挑戦する課題となる。なぜならそれは「女らしい仕事」と観念されてきたからだ。育児や家事という他人をケアする行動をとおして自分のなかの女性的役割とされる側面を意識し、思い通りにならない子どもを育てながら、まったくの子ども中心、つまりは受け身となり、かつて自分の母親が自分に対してしていたことと同じことをするというのが育児と家事の男にとって位置づけとなる。これを担うのが「ママパパ」になるということだ。男親から父親への変化であ

り、そこでは父性が育まれるということだ。

これまで身につけてきた男性性とケアする役割の両方を演じることができるような男でなければ、良い父親にはなれない。生殖能力の差異は大きく、男性は親になるのに意識的な努力がいる。父親は父親なりの仕方と意味づけで子育てに関わる。けれどもそれは社会的に作られている「男らしさイメージ」と時には対立する。男性が「ちょっと今日は子どもの面倒みるので早く帰りたい」と上司にいうにはまだまだ勇気がある。ケア機能を発揮するには相当な決意がいるということである。

とはいえそういう闘いをしてまで男性が「ママパパ」になるには意味がある。ケアする父親は子どもにとっては新しい男イメージとなる。安心感もつくりだす。遊んだり食事をしたりして一緒に何かをする協働体験や体感的な記憶も大事だし、父親の働く姿をみることに、そして何よりも父親が子どものことに関心をもっていることへの信頼感、こうしたことから形成される父子関係が重要だと思う。そのことをとおして情緒的な絆が形成されていく。情緒や感情をもとにした、これまでの男性にはない新しい関係をつくることのできる一つのチャンスだと考えるべきなのだ。

冒頭に述べたように男親というのは男性性を意識した言い方である。パワーという言葉がイメージできる。また、父親というのは家族制度の印象があり、大黒柱役割を意味するキャッシュに傾斜している。つまり、男性の生活はパワーとキャッシュに力点があり、ケアから疎外されているといえるだろう。虐待親たちとのグループワークから、男親であることから脱して、徐々に父親であることの大切さを感じていくが、その過程で涵養すべき親性のひとつとして

の父性 fatherhood を浮かびあがらせるようにしている。そこをとおして育児や介護を志向する男性のケアにむかう回路が拓かれていくと思う。こうして身に付く能力は、この文脈ではケアという言葉を使ってきたが、さらに広い言葉へと広がる内容がある。仕事や会社でもそうだが、後進を指導する際の「次世代育成力」と重なる内容をもつと思う。まだまだ硬い言葉だが、しなやかなリーダーシップともいえる。父性として涵養していきたいさまざまな力は応用可能性が広く、社会的にも意味のあることだと思う。その開発はあらゆる場面での男性の感情的知性 (EQ) を豊かにしてくれると実感する。

なかむらただし (社会病理学／臨床社会学)